

日本では多くの針灸師が灸頭針を用いている。これはなぜなのだろう。一つ考えられることは、中国針は針柄が長く、多くは針尾は巻柄であるので、灸頭針には不向きであり、灸頭針を行う場合は、灸頭針用の特別な針を必要とするのに対し、日本針は針柄が短くて細く、針根がかしめ固定されているので（かつては半田付けだったが）、どの針も灸頭針にすることができ、また紙巻き灸頭針用切り艾が普及しているので、手軽に灸頭針ができるようになったということである。

将来の針灸書では「温針は近年、倭人の法となった」とでも書かれるのであろうか。



針灸歌賦

何年か前に、兵頭明先生（後藤学園中医学研究室室長）が、「これからは中国の針灸歌

賦を發掘しなければならぬ」といった内容のことをおっしゃっていたのを、雑誌かなにかで拝見したことがある。その時は、ちよつと気に止めたものの、忙しさに紛れて、頭の片隅にしまいこみ忘れていた。そんな折り、昨年末（一九九八年）の『鍼灸OSAKA』五十一号の座談会「中医学を臨床に生かす」の中の終了場面「最後に一言」で、再度、針灸歌賦の發掘の重要性を強調されておられるのが、目に止まった。

針灸歌賦というと、私にもひとつ思い出がある。今から二十数年前、当時の上海中医学院に研修に行かれた丹沢章八先生（現全日本鍼灸学会会長）が、天津市中医医院の『針灸配穴』を日本に持ちかえり、ひよんなご縁から私とその翻訳を請け負うこととなった。同書を見ると、そこには、症状に対する配穴、現代医学の疾患に対する配穴の他、歴代の針灸歌賦の配穴も書かれていたのだが、いずれも「蠱脹——三陰交、水分、足三里」といった形で表記されていた。その時は、これでは味もそっけもないなど思い、歴代の針灸歌賦については、「蠱脹——三陰交、水分、足三里」（蠱脹は腹部が鼓のように膨満すること。この三穴を取る場合は、水毒の気が結集して起る水蠱を指す）といった訳注をすべてに付した（訳書は同名『針灸配穴』で、一九七七年に刊々堂出版社から出版）。

しかし、考えてみれば、針灸歌賦とは韻をふんだり、対になっていたりと、五言絶句の形式を模したりしているものの、その骨組みは、「蠱脹——三陰交、水分、足三里」にすぎないのであり、これはあくまで暗唱することで臨床に役立てようとする、実利的目的で作られたものなのである。

針灸歌賦は明や清の時代に盛んに作られた。とくに清代には、新たに六十首もの針灸歌賦が編み出されたように、歌賦の黄金時代であった。また、針灸に関する短編の通俗的な読み物が数多く世に出された。と同時にその時代は、草繩法といった取穴法の複雑さが際立った時代でもあり、一方で高武がかつて『針灸聚英』の中で厳しく批判した「血忌、人神、尻神、子午流注」などの針灸理論が幅を利かせた時代でもあった。極論すれば、極めて実用的な歌賦形式の針灸と、難解な針灸理論が分離してしまった時代といえるのではないだろうか。

道光二年（一八二二年）、勅命によって太医院針灸科は永久に廃止する旨が宣言された。この理由を、『中国針灸学史』（寧夏人民出版社）では、①清朝政府の腐敗、②西洋医学の伝入、③重菓廃針派の挾撃、と記している。しかし、事物の変化は内因が主であることからすれば、針灸医学それ自体に滅亡の要素があったのであり、それを助長する外在条件として上記の①②③のような事柄をあげることができる。では、その内因

とは何なのか。はっきりしていることは、当時の宮廷において針灸医学が評価されていなかったことであり、それは針灸治療が、当時の統治者にたいし功を奏することができなかったことによるのであろう。

いずれにしろ、これは中国古代針灸が終焉したことを示す象徴的事件といえよう。とすれば、針灸歌賦は中国古代針灸が滅びにいたる、その序章といえないだろうか。

一九九九年第一期の『中国針灸』に南京中医药大学針灸研究所の徐斌氏が「穴性論」と題した論文を発表しているが、その中に歌賦に触れた部分がある。同氏は「後世の一部の歌賦は膻穴の主治の性質を特に強調した。『玉龍歌』はその代表格である。それは主治をもって穴性に代える傾向を人々に惹起した。……」と、歌賦が果たした否定的役割について述べている。したがって、針灸歌賦の発掘とは、当然、歌賦の中国針灸史上における位置を明らかにした上で、何のために、どのように発掘していかなければならないのだが、同時に示されていなければならず、ただ単に埋もれた歌賦を掘り起こすといったことであるならば、それはわれわれの掌中に、「特效穴」と呼ばれる膻穴の主治が幾つか増えるだけのことにすぎない。

当然、兵頭先生はその辺のことを把握した上で、針灸歌賦の発掘を、今後のわれわれの課題に設定しておられるのであろう。限られた時間と紙面の座談会といった性格からは舌足らずに終わることは止むを得ないことであるが、今後、同氏が歌賦を発掘するための筋道を明らかにしていかなれることを期待している。



「効能」と「穴性」

「効能」という言葉に初めて出会ったのは、上海中医学院（現在の上海中医药大学）が編纂して、人民衛生出版社から一九七四年に出版された『針灸学』だった。私は当時、針灸学校の三年生だったが、授業はもちろんのこと、授業で使用していた経穴学の教科書（医歯薬出版の『漢方概論・経穴編』）でも「効能」に類するものは全く見あたらず、経穴の